

Jennifer Jihye Chun著

## *Organizing at the Margins :*

*The Symbolic Politics of Labor in South Korea and the United States*

評者：鈴木 玲

本書は、アメリカと韓国の社会運動ユニオニズムの体系的な比較研究である。両国の労働市場の「周辺部」(margins)で働く低賃金・不安定雇用労働者が法的あるいは制度的困難にもかかわらず労働組合を結成し、社会的支援を背景に経営者に要求を突きつけ、労働条件の向上を勝ち取っていく過程を比較分析する。アメリカと韓国の資本主義の発展の歴史は大きく異なるものの、新自由主義経済の影響や経営者の反組合政策により労働運動が（アメリカでは70年代末以降、韓国では90年代以降）守勢に立たされたこと、同時に組合に組織されていない低賃金・不安定雇用層（アメリカでは移民労働者、韓国では女性労働者が中心）が急増したことで、両国は共通点をもつ。著者は、両国で社会運動ユニオニズムが低賃金・不安定雇用労働者を組織して発展したこと、組織化の際にこれらの労働者が労働市場や雇用関係での弱い交渉力を補完するためにシンボリック影響力（symbolic leverage）を行使したことなどにおいても共通点があると指摘する。

### 本書の内容

本書は、「はしがき」と7つの章から構成されている。「はしがき」では、著者が周辺部の

労働者の組織化の米韓比較をテーマとして取り上げるに至った経緯、本書の中心的な検討課題あるいはリサーチ・クエスチョン（「社会的・経済的・政治的に重複して周辺化された労働者たちが、劣悪な雇用形態を支える不平等な権力・支配関係を実際にどのように変革していくのか」など）が述べられている。第1章は、本書の分析枠組みの中核となるシンボリック影響力がどういう概念であるのか、および分析対象（下請けの清掃会社に雇用されている労働者と個人請負労働者）の説明をする。シンボリック影響力の理論的背景には、ベバリー・シルバーの2つのタイプの労働者の権力（構造的権力 [structural power] と組織的権力 [associational power]）とピエール・ブルデューの象徴的支配（symbolic power）がある。著者によると、シンボリック影響力は、労働市場や雇用関係において立場が弱い「周辺部」労働者の組織的権力を強めるもので、「カテゴリー闘争（classification struggles）」と「公共空間でのドラマ（public drama）」から構成されている。

第2章は、アメリカと韓国の労働運動が時期は異なるものの発展と衰退の軌跡をたどったことを指摘する。すなわち、アメリカと韓国の労働運動は、それぞれビジネスユニオニズムと戦闘的労働運動を通じて経営者から一定の経済的譲歩を引き出したものの、アメリカでは70年代末以降、韓国では90年代後半以降、経営者や国家の攻撃にさらされて弱体化した。第3章は、アメリカと韓国の労働市場の下層部分（lower tier）に置かれている「周辺部」労働者の実態について労働統計を用いて検討し、労働市場の下層部分がどのように形成・再生産されているのか分析する。アメリカと韓国の労働市場の下層部分にそれぞれ移民労働者と女性労働者が集中する過程で、国家や自治体政府の政策（アメリカの場合は移民政策、福祉削減政策、都市再

生政策、韓国の場合は産業政策や労働市場政策)が重要な役割を果たしたことを指摘する。第4章は、アメリカと韓国の労働運動が排他的な政策を見直し、労働市場や雇用関係で不利な立場にある低賃金・不安定雇用労働者を組織化する包括的な政策に転換したと指摘する。アメリカの場合、これらの労働者の組織化の取り組みでは、過去の社会運動(60~70年代の農業労働者運動、学生運動など)の戦略のレパートリー(例えば、反企業キャンペーン)と活動家層の人的資源の蓄積が利用された。韓国の場合、非正規労働者や「特殊雇用」(個人請負)労働者の組織化は、労働運動内部の批判勢力、具体的には現場の左派活動家や女性労働者運動の活動家およびこれらの活動家により結成された組織、によって支援・推進された。

第5章と第6章は、本書の米韓の「周辺部」労働者の組織化事例の比較分析を行う。第5章は、実質的な使用者に直接雇用されず、下請け業者を通じて間接的に雇用されて働く労働者、具体的には大学(アメリカでは南カリフォルニア大学とハーバード大学、韓国ではイナ大学とソウル国立大学)で働く清掃労働者(ジャンター)を事例として取り上げる。雇用契約上は間接雇用なため、賃金や労働条件をめぐる大学当局と直接交渉ができない清掃労働者たちは、大学当局が実質的な雇用者であることを認めさせる闘争(「カテゴリー闘争」)を行った。大学当局が間接雇用を理由に清掃労働者との交渉を拒否すると、労働者たちは闘争をエスカレートさせ、自分たちが置かれている状況が不公正・不正義であると広く社会に訴える闘争(「公共空間でのドラマ」)を実行した。多くの支援者・支援組織を巻き込んだ「公共空間でのドラマ」闘争により大学当局への圧力が強まり、南カリフォルニア大学、ハーバード大学、イナ大学の当局は清掃労働者の組合との交渉に応じ、

労働者の要求に譲歩した。ソウル国立大学は清掃労働者組合とは直接交渉しなかったものの、清掃会社との下請け契約の条件を変更して、清掃会社が労働者の要求通りに賃金引上げができるようにした。

第6章は、ロサンジェルス郡の在宅介護労働者と韓国のゴルフ場で働くキャディが個人請負労働者として扱われることに異議を唱え、実質的な雇用主に対して「労働者性」(そのコララーとして労働組合の承認)を要求する「カテゴリー闘争」を分析する。アメリカの場合、SEIU(全米サービス従業員労働組合)のローカル組合(434B)が在宅介護労働者を組織化した。しかし、在宅介護労働者の「労働者性」を認めない郡政府は、ローカル組合を正式の組合として承認しなかった。ローカル組合は組合員の草の根レベルの活動を活性化させて在宅介護労働者の地域社会での認知度を高めるとともに、在宅介護サービス受益者団体などとの協力関係を強め、介護労働者の組織化をコミュニティ全体にかかわる問題として再定義して郡政府への圧力を強めた。その結果、郡政府は在宅介護を扱う公社の設置を決定し、その組織を在宅介護労働者の正式な使用者とした。SEIUローカル434Bは7万4000人の在宅介護労働者を正式に代表する組織と承認され、使用者との団体交渉の結果賃金引上げと健康保険の付加給付を勝ち取った。

韓国の事例は、88カントリークラブ(88CC)というゴルフ場で働くキャディ(女性労働者)が結成したKWTU(韓国女性労働組合)88CC支部を正式な労働組合として経営者に認めさせる闘争である。88CCの経営者が40歳以上のキャディを解雇するという方針を示したのに対し、キャディたちは性差別・年齢差別に対抗するためにKWWAU(韓国女性労働者会協議会)の指導のもと解雇反対闘争を展開した。解雇撤回を

勝ち取った後、60人のキャディたちはKWTUの支部を結成したが、経営者はキャディが個人請負労働者であるという理由で労働組合を認めようとしなかった。さらに、経営者による脅迫・暴力行為や指導者の実質的な解雇などの組合潰しに抗議するため、支部は9割以上の組合員の支持を得て「正義と尊厳」を求めてストライキを執行した。88CC支部やKWTUの活動家たちは、明洞などのソウルの繁華街で抗議行動を行いキャディの労働条件の実情を社会に広く訴えるとともに、政府労働部のビルの前でキャディの労働性を求める抗議集会を行うなど、「公共空間でのドラマ」を展開した。労働部がキャディの労働者性を認める声明を出した後も、88CCの経営者は組合をなかなか認めようとしなかったが、最終的に団体交渉に応じることに合意し、組合承認、組合活動の保証、労使間の話し合いの場の設置、セクシャルハラスメントの防止対策などを盛り込んだ労働協約を組合と結んだ。88CCのキャディの闘争は、他のカントリークラブのキャディの組織化や、家庭教師や保険販売員などの他の「特殊雇用」労働者の組織化キャンペーンの契機となり、「周辺部」労働者の労働運動に影響を与えた。

第7章（結論）は、本書の主要な論点をまとめ、労働市場や雇用関係での立場が弱い「周辺部」労働者による「シボリック的影響力」の行使が彼ら・彼女らの仕事や生活での厳しい状況を打開するための重要な手段を提供すると論じる。さらに、米韓の労働者がそれぞれニューディール以前の時代、権威主義的な経済発展の時代にシボリック的影響力を行使したのと同様に、既存の労使関係制度が労働者の権利保護や不満の解決において機能不全に陥っている現在の状況においても、シボリック的影響力は再び重要になっていると指摘する。しかし、著者は同時に、「何のためのシボリック的影響力なのか？」

という問題を提起する。すなわち「周辺部」の労働者の闘いが労働運動全体や労使関係制度あるいは政治や経済体制の変革を促さなければ、これらの労働者は雇用関係や労働経済において常に不利な立場に置かれる。そのため、シボリック的影響力の行使による闘いにより状況がなかなか改善されないと、楽観的展望や運動への熱意が弱まり、「周辺部」の労働者の闘いは長期的に衰退する可能性がある。著者は、この問いに対する簡単な答えはないとしながら、「周辺部」の労働者の闘いの意義が、アメリカと韓国との労働運動全体が直面するディレンマ（労働運動内部の戦略をめぐる対立）を浮き彫りにすること、搾取や貧困を生み出す地域、国家、国際レベルの権力関係の力学を明らかにすること、にあると論じる。

#### 本書のコメント

以上の内容のまとめはやや簡略であるため、本書の随所にみられる米韓の労働運動の現状や歴史についてのニュアンスある比較分析を十分に取り上げることができなかった。本書の重要性は、社会運動ユニオニズムの先行研究が北米（とくにアメリカ）の事例が中心で、北米以外の国との体系的な国際比較はこれまでほとんど行われていなかったなかで、アメリカと韓国の社会運動ユニオニズムを同じ分析枠組み（シボリック的影響力）を使い体系的に比較し、先行研究が見落としがちである社会運動ユニオニズムを形成する広義の構造的要因（労働市場の下層部分（lower tier）の形成と再生産）や国ごとの類似点（どちらも「カテゴリー闘争」と「公共空間でのドラマ」を闘争戦略に組み入れていることなど）や相違点（社会運動ユニオニズムの担い手の違い、社会運動と労働運動の結びつき方の違いなど）を指摘したことである。すなわち、北米モデルを理念型とする傾向にある多

くの研究に対して、本書は社会運動ユニオニズムの概念を「相対化」して、国際比較の意義を示したのである。

本書について評者が感じた問題点は、中心的概念である「シボリック的影響力」がどの程度オリジナルな分析概念であるのか、道徳経済(moral economy)などの既存の概念とどのように異なるかということである。著者は、ブルデューの象徴的支配に依拠してシボリック的影響力のオリジナリティを説明するが、不勉強の評者としては何も「認識や文化をめぐる闘争」や

「象徴的資本」などの抽象的概念を使わなくても、「周辺部」の労働者の闘争を説明できるのではないかと感じる。分析概念が過度に抽象化されると、解釈の拡大が可能になり、「何でも説明できる」分析概念になってしまう恐れがある。

Jennifer Jihye Chun. 2009. *Organizing at the Margins: The Symbolic Politics of Labor in South Korea and the United States*. XX+221 pages. Cornell University Press.

(すずき・あきら 法政大学大原社会問題研究所 教授)

<p>■両機関の営みに共通する地下水脈を探索する</p> <p><b>戦間期日本の社会研究センター</b></p> <p>大原社研と協働会</p> <p>高橋彦博 著</p> <p>A5判上製 364頁 6,090円</p>	<p>■社会労働運動史の定説を覆す、再評価の試み</p> <p><b>協働会の研究</b></p> <p>法政大学大原社会問題研究所 編 梅田俊英・高橋彦博・横関至 著</p> <p>A5判上製 388頁 5,460円</p>	<p>■歴史的価値の高い精密な生活実態調査の記録</p> <p><b>都市・農村生活調査資料集 I・II</b></p> <p>「I」A5判上製 全12巻 総4,760頁 「II」A5判上製 全12巻 総6,080頁</p> <p>揃2,602,500円</p>	<p>■大原社研が保管する膨大な協働会基幹史料を公開</p> <p><b>日本社会労働運動資料集 I・II</b> (マイクロフィルム版)</p> <p>「I」一九二〇～三〇年代」全114リール 揃2,730,000円 「II」一九三〇～四〇年代」全62リール 揃1,575,000円</p>	<p>【第一回配本】一九二七年～一九三三年 A4判上製 全7巻十別巻 総2,710頁 揃2,940,000円</p> <p>【第二回配本】一九三四年～一九三八年 A4判上製 全8巻 総2,876頁 揃2,940,000円</p> <p>【第三回配本】一九三九年～一九四四年／補遺 A4判上製 全8巻 総2,524頁 揃2,940,000円</p>	<p>【協働会史料】 法政大学大原社会問題研究所 監修 協働会研究会(梅田俊英・高橋彦博・横関至) 編</p> <p>■わが国労働安全運動の源流と展開過程が明らかに</p> <p><b>『産業福利』復刻版(全三回配本)</b></p> <p>産業福利協会が一九二六年に創刊し、以後発行主体を変えながらも一九九一年間にわたり刊行された月刊誌を完全復刻。草創期の安全衛生運動の実態を継続的に把握でき、現代の労災問題への貴重な示唆を与えうる基礎史料。第三回配本では、第一巻全二巻を補遺として収録。</p>